

## 伝道者の書 一 概略

■ 伝道者の書は、1章はじめに神の知恵について語り、12章最後で人が求めるべき知恵について語る。この世で人が直面するふたつの大きな問題である経済的繁栄と政治的な権力がこの書で取り扱う知恵であることを概略を通して確認する。

日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。(1:3)  
神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人にとってすべてである。(12:13)

	(c) 1:1-11 変らない神の知恵(神のことば)
(7) 6:10-7:14 人は何が起るのか知らない 死の日、ことの終りは良い	(1) 1:12-2:11 知恵を求めて知恵を得た 富と誉れを求めてそれを得た
(8) 7:15-8:1 知恵を求めても見きあめられない 道理を見いださずとも見いだせない	(2) 2:12-26 知恵者も愚か者も同じ結末 労苦してもしなくても同じ結末
(9) 8:2-9:1 すべてのことに時とさばきがある すべては神のみあざである	(3) 3:1-15 すべてのことに時がある すべては神のみあざである
(10) 9:2-9:12 すべての事はすべての人に同様に起る すべての人が時と機会に会う	(4) 3:16-4:6 人も獣も同じ結末 支酉しても支酉されても同じ結末
(11) 9:13-10:20 知恵のことばが支酉する 愚か者の支酉は悪である	(5) 4:7-5:12 富を求める労苦に終りがない 富を愛しても満たされることはない
(12) 11:1-12:7 後の日の神のみあざを知らない 若い日にあざあいの日を知れ	(6) 5:13-6:9 労苦しても富を失い裸となる 長生きしても最後は死ぬ
(c) 12:8-14 知恵のある者のことば	

- (1~6)は、労苦して益を得ること。(7~12)は、知恵によって良悪をさばくこと。
- (1~6)の鍵文は「すべてはむなしく、風を追うようなものだ」。
- むなしいは、ヘベル(蒸気、霧、雲)。風は、ルアフ(風、息、霊)。追うは、(羊飼)いる)。
- (3,4)(9,10)「すべてに時がある」。
- 「食べて飲んで楽しみ、労苦を喜びが人の受ける分である」は、(1)~(6)、(9)(10)。(6)は強調。
- (3)(9)は、神の知恵。(6)(12)は、人が知るべき知恵。
- (1,2)(7,8)は、知らうとしたがわからない。(4,5)(10,11)は、日(太陽)の下で見たこと。
- 良と悪の知識とは、死を知っていること。
- 日の下で人が求めるもの:富、経済力、人の方法:労苦のあざ、不信仰:心酉、結末:消える、神の方法:神のみあざの時
- 日の下で人が求めるもの:力、政治力、人の方法:善悪のさばき、不信仰:文句、結末:終る、神の方法:神のさばきの時